

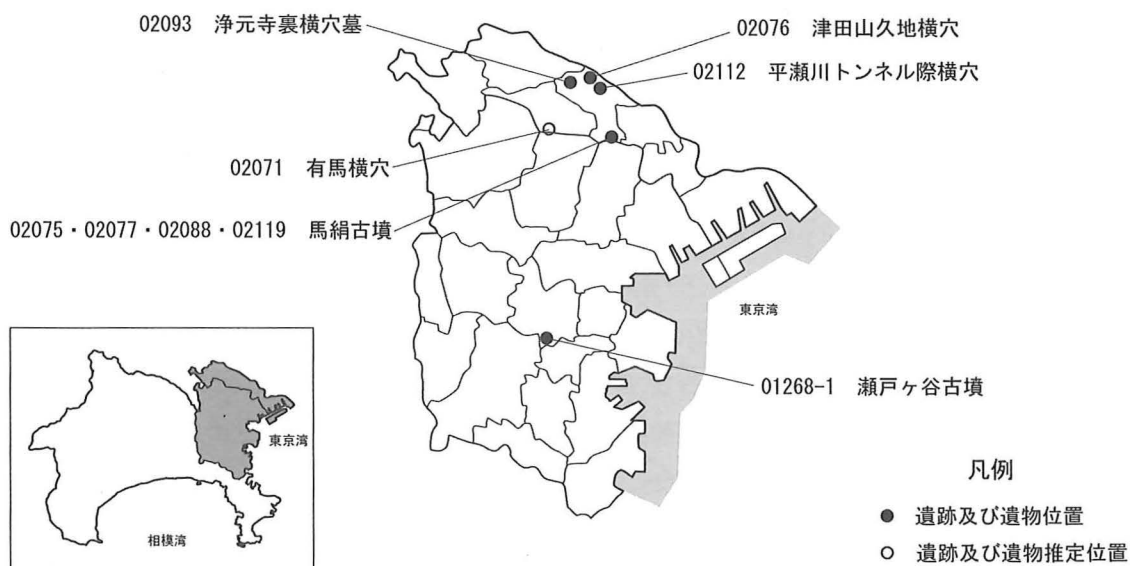
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(7)

一通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介

古墳時代研究プロジェクトチーム

例 言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第14号には横浜市域にあたる01268-1番、川崎市域にあたる02071・02075・02076・02077・02088・02093・02112・02119番を掲載している。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～18に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は01268-1番：植山英史、02071番：小西絵美、02075・02077・02088・02119番：柏木善治、02076番：新山保和、02093番：林 雅恵、02112番：吉田映子が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1の細目は〔調査（踏査）年月〕〔資料保管場所〕〔記載内容概略〕とし、2は〔（遺跡及び）遺物（遺構）概要〕〔掲載図書〕〔掲載図書概略〕〔小結〕などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡及び遺物位置図

年報番号横浜1268-1 瀬戸ヶ谷古墳（4） 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

〔調査（踏査）年月〕 1943・1950年

〔資料保管場所〕 東京国立博物館

〔瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート4〕

前回は01268-1・1及び沙羅書房封筒に入れられた01268-1・2の一部（①）を紹介した。引き続き今回は01268-1・2②について取り上げる。

②出土埴輪図（A4・方眼紙）7枚（前々回6枚としたが7枚に訂正する）（第2・3図）

いずれもA4サイズの方眼紙に書かれている。方眼マス目は5cmで11線、1マス約0.45cmである。以下、方眼紙枚に概要を記す。

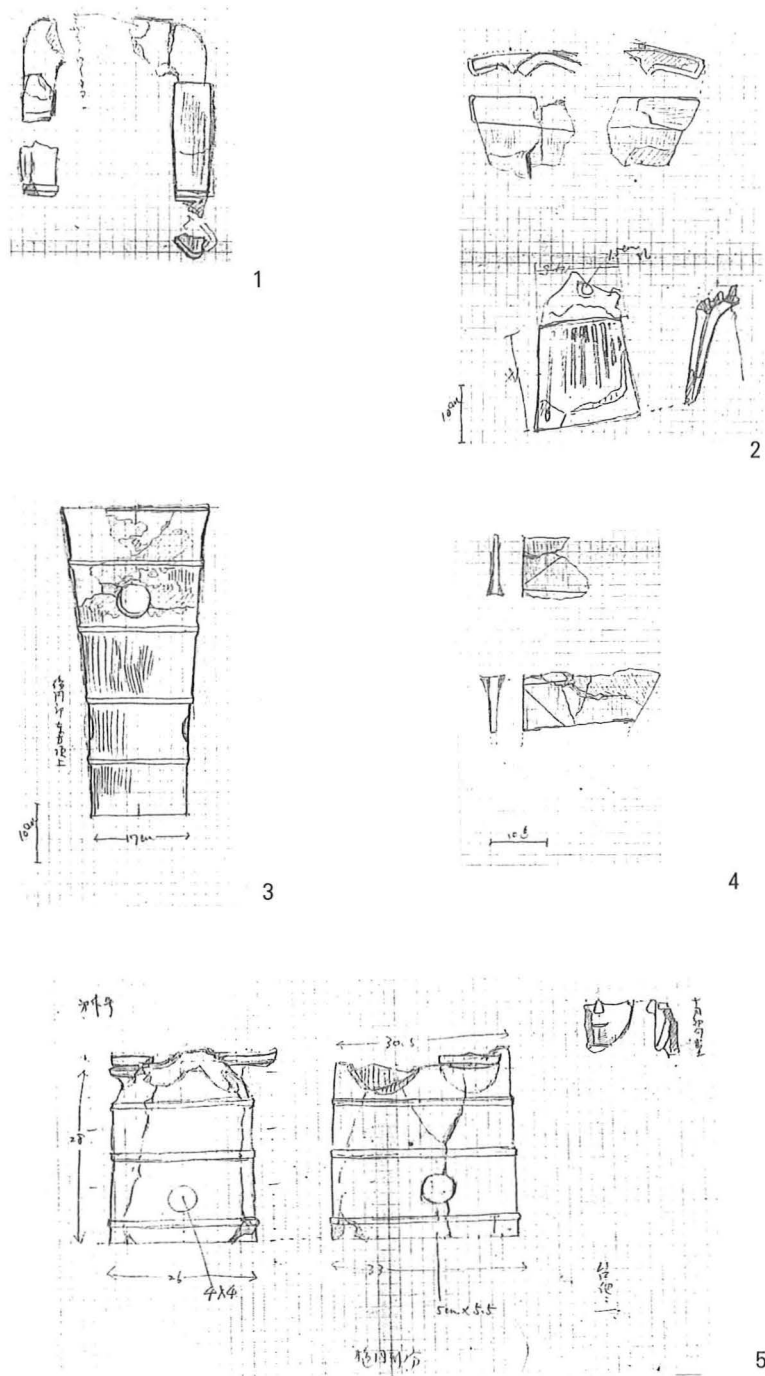
第2図1は人物埴輪の両腕である。左腕欠損部に「〇〇〇ノワイタアト」と書き込みされている（〇〇〇は判読不能）。盛装男子立像の腕と思われる。2は上下に別破片が描かれ、上図は形象埴輪片2点の接続部である。下図は板状の器面に縦位の線表現があり、断面は下方で屈曲している。鏝表現のある韃の先端部が、上下反転して描かれたものと思われる。左端に5マス10cmのスケールが描かれる。鉄鏝が表現された部位の長さに「18」、横幅に「14.5」の記載があり、それぞれcmを表していると考えられる。

3は円筒埴輪で、左に「後円部前方頂上」のメモ書き、左端に5マス10cmのスケールが書かれている。円筒埴輪は4条突帯が巡り、2段目両端と4段中央に円形スカシ孔が表現される。最下段～3段目までは完存の状態に描かれ、4段・最上段には欠損表現がある。器面には最下段～3段まで部分的にタテハケが表現され、4段目はタテハケとスカシ孔の回りはナナメのハケ、最上段もナナメのハケが描かれる。底部に「17cm」と書かれ、スケールに従うと器高約55cm、口径約26cmとなる。

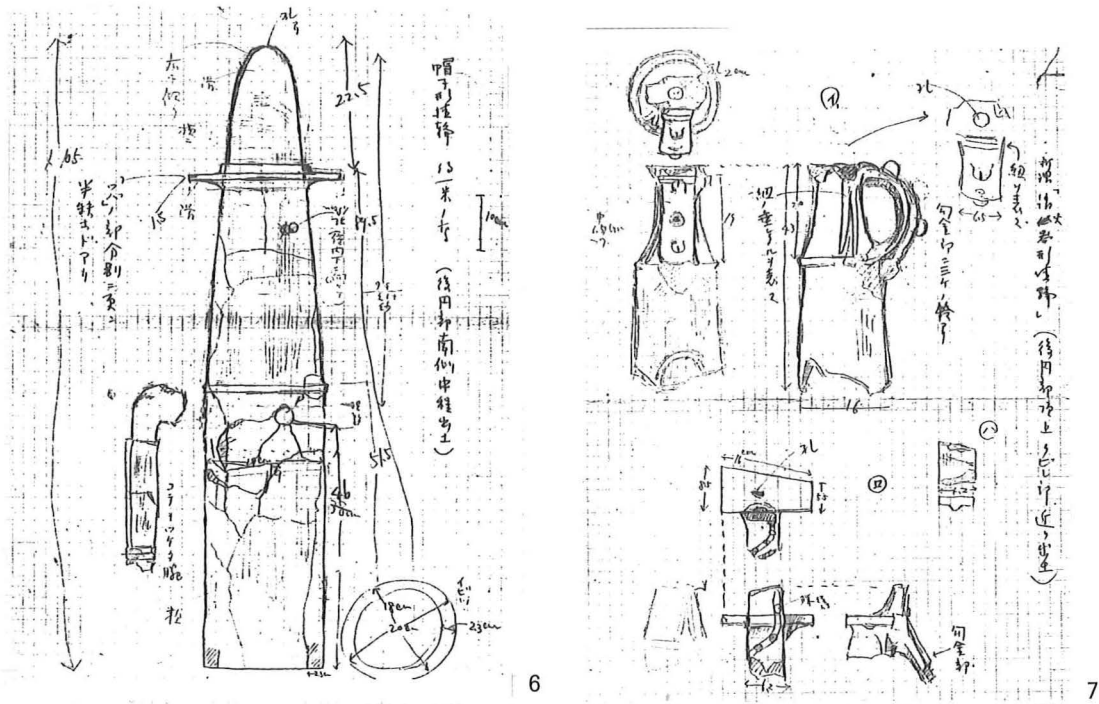
4は板状片2点で、両面の下（上）端が裾広がりになる様子が断面（側面）図に表現されている。器面には、タテハケと斜方向の線刻と思われる表現が2点ともに認められる。盾形埴輪の破片と思われるが、全容は不明である。

5は形象埴輪の台部と、人物埴輪の顔片である。左側の台部は底径「26」、器高「28」、円形スカシ孔「4×4」と書かれおり、スケールは無いが、2・3と同様5マス10cmで描かれている。台部上端には器面に「へ」の字状の表現があり、右端部は鏝状に延びている。中央は底径「33」、上端欠損部「30.5」、円形スカシ孔「5cm×5.5」の記述がある。また、図の下に「楕円形ノ方」という書き込みと楕円が書かれ、台部が楕円を呈していることを示している。上端の欠損部には、人物のつま先と思われる表現があり、人物立像の台部と考えられる。右は、人物顔面の鼻から下の一部を残す破片である。図の右に「十月初旬出土」と書かれる。側面の図から、顔面は板状の粘土を貼り付けて成形したことが判る。紙の左上に「第4号」、右下に「台他二一」の書き込みがある。第4号は遺物の取り上げ番号、若しくはトレンチ等の番号を指すものであろうか。

6は帽子形埴輪と人物埴輪の腕片で、右に「帽子形埴輪約一米ノ〇（後円部南側中程出土）」とある。右端に5マス10cmのスケールが書かれ、下段の円形スカシ孔まで「3846cm」、下段突帯まで「51.5」、上段鏝まで「89.5」、鏝幅「1.5」、帽子部「22.5」の数値が記載される。右には「ワッパ」ノ部分別二更二半缺出ドアリ」と書かれる。その他頂部に「孔」、二段目の円形小孔に「孔1.5cm」「（僅内下に向ケテ）」、帽子部と鏝それぞれに「滑」などの書き込みがされる。底部の径は「20cm」、器厚「2・3cm」と記載される。



第2図 瀬戸ヶ谷古墳出土埴輪略測図 [01268-1・2②] (1) (原図の1/3)



第3図 瀬戸ヶ谷古墳出土埴輪略測図 [01268-1・2②] (2) (原図の1/3)

右下には底面の略図と考えられる図が描かれ、長径「20cm」・短径「18cm」・器厚「2・3cm」、略図右側に「イビツ」と記載される。人物埴輪腕部片は右肩から手首を残すもので、手部を欠損している。右には「コテヲツケタ腕」と書かれる。

7は右端に「所謂「消火器形埴輪（後円部頂上クビレ部近ク出土）」と記述される。図は丸付の「イロハ」に三区分されている。イは大刀形埴輪の上半で、正面・側面が描かれている。また、上に環頭が描かれている。「勾金部二三ケノ鈴アリ」とあり、上方に矢印で頂部の平面に孔が空いている様子が描かれる。柄部の器面に2本の帯状の紐表現があり「紐ノ垂レタルヲ表ス」と記される。残高「43」、柄部高「20」、下端欠損部部径「16」cmである。環頭部の下端には臍が付き、差込式になっていることが判る。円環の中には単頭の龍もしくは鳳凰と思われる表現があり、中心の目にあたる部分に孔が描かれ「孔2cm」と書かれている。ロは別個体と思われる柄部片で、斜位の帯状表現に玉状の飾り3個描かれており、玉状の飾りに「珠朱径1.3cm」と記入される。頂部の平面図は長台形を呈し、中央に半円状の孔が描かれている。

右図には「勾金部」と描かれる。ハは破片資料で幅「6.2」と記される。

以上が今回取り上げた資料の概要である。第2図3は瀬戸ヶ谷古墳(1)で取り上げた01087台紙3の写真と同一個体である。この帽子形埴輪は他の幾つか埴輪とともに、1949年に東京国立博物館が神奈川県教育委員会から買い上げ、現在でも所蔵している(東京国立博物館1986)。従って、本資料は1943年の調査時出土した遺物であり、作成時期については発掘調査実施時から1949年までの間であると推定される。01087台紙には「昭和19年頃」の記述があり、その前後の可能性が考えられる。資料内容は注視すべき点が多いが、その検討は後に譲り、引き続き次回以降も資料紹介を進めることとしたい。(植山)

引用・参考文献

東京国立博物館1986「16. 鶴見川流域の埴輪」『古代の横浜』 1986『東京国立博物館図録 考古遺物編』(関東Ⅲ)

年報番号02071 川崎市有馬横穴 （川崎市宮前区有馬所在か？）

1. 赤星ノートの内容

[資料概略]

資料が収められている封筒には「AROMA COLOR」と印字されており、その端には「横穴・板碑 川崎・横浜」とメモが書かれている。封筒内には台紙に貼られた4枚の写真が保管されている。台紙として用いられたのは県史編集室の「神奈川県内主要遺跡・遺物調査票」で、その裏面に写真が2枚ずつ貼付されている。4枚の写真はアングルを変えて有馬横穴を撮影したものと考えられ、台紙下部には「川崎市有馬横穴（ローム中） 塚田朋滋撮」、「有馬横穴 塚田撮」という赤星氏による書き込みが見られる。写真を受領した年月日や「有馬横穴」の所在地等の情報は記載されていない。

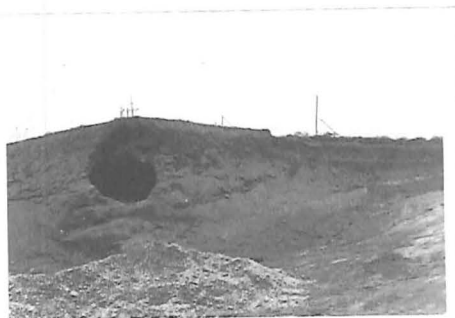
2. 記載資料の整理

[遺構概要]

以下、写真から読み取れる「有馬横穴」の状況について整理していく。開口する横穴墓が穿たれた斜面の上方には、工事用の丁張と思われるものが複数建っている様子がうかがえる。また、横穴墓周辺の状況を考え合わせると、この横穴墓は工事中に発見されたと考えられる。そして、写真1が貼られた台紙には同横穴墓がローム層に穿たれていることを示すと思われる「（ローム中）」との記載があることから、横穴墓周辺はローム層が完全に露出した状態であることが推測される。写真1－上は同横穴墓内部から開口する部分を撮影したものであり、壁面に残存する工具痕が明瞭に写っている。一方、写真2はアングルを写真1－上から横穴墓内部に向け、横穴墓内を撮影した写真である。写真に写る壁面から天井部にかけての様相や、写真中央付近に写る開口部分、その開口部分から手前に落ち込むように出土している石の存在等から、この部分が横穴墓の玄室であり、開口部分が玄門、その奥は羨道であると考えられる。その場合、玄門奥、つまり羨道側から玄室内へと落ち込んでいる石は閉塞石と捉えられよう。工事等により露出したのは横穴墓の開口部ではなく玄室部分であり、玄室の奥壁周辺が破壊され写真1－下にある状況に至ったと考えられる。写真2から得られる情報には限度があるものの、以下のようなことが列挙できる。まず、玄室の平面形態に関してだが、辛うじて写っている玄室の両側壁の様子から判断すると台形あるいは方形となる可能性が高い。これは、当プロジェクトチームが1996年に行った横穴墓の平面形態構造の分類によるところのⅠ類（台形）あるいはⅡ類（方形）に該当する。これらの写真だけでは玄室内の空間規模等も把握できないため、これ以上の分類は難しい。写真2では玄室手前に散在する閉塞石や玄室床面に堆積する覆土に阻まれ前壁形態を確定することは厳しい状況だが、写真から観察できる玄室床面覆土の稜線からおそらくは同分類による2類（前壁角度110°以上）に当てはまるのではないだろうか。写真2に写っている玄室内の状況を見る限り、玄室からの副葬品等の出土はなさそうである。また、玄門から羨道にかけて閉塞している印象を受けることから、塚田氏によってこれらの写真が撮影された時点では少なくとも同横穴墓の羨道より先の部分は開口していなかったようである。

[掲載図書]

これら4枚の写真が掲載された文献等については、管見に及ぶ限り見当たらない。なお、ここで取り上げた「有馬横穴」に関しては詳細な所在地等も定かではない。「有馬横穴」という名称は単に有馬で発見された横穴墓ということを示しており、正式な遺跡名ではない可能性が高い。（小西）



川崎市有馬横穴（口一ム中） 塚田明弘 撮

写真1 上：有馬横穴開口部 下：遠景（凡そ原本の1/2）



有馬横穴

塚田 撮

写真2 上下：玄室内部状況（凡そ原本の1/2）

年報番号02075・02077・02088・02119 川崎市馬絹古墳 川崎市宮前区馬絹

1. 赤星ノートの内容

馬絹古墳は1971(昭和46)年に県指定史跡となる。終末期古墳とされるが、石室内から出土した遺物は盗掘を受けていたため、鉄釘79点が知られるのみとなっている。

[記載内容概略]

02075『馬絹古墳保存活用計画調査報告書』(東急建設株式会社技術研究所・昭和53年3月刊)

『考古学資料館要覧 一関東の古墳時代文化』(國學院大學考古学資料館・昭和52年10月刊)

「馬絹古墳保存活用計画調査に伴う全体討議について」馬絹古墳保存活用計画調査団団長からの依頼文(昭和53年2月付)

02077 馬絹古墳周辺の写真 6葉(台紙に3枚ずつ貼付・馬絹古墳 昭57.2とメモ書き)

02088 昭和47.4.21 神奈川新聞(夕)『高句麗文化を実証』(樋口國學院大教授の解説を中心とした記事)

馬絹古墳内壁の漆喰画(國學院大學考古学資料館要覧から複写撮影)

馬絹古墳石室(國學院大學考古学資料館要覧から複写撮影)

樋口清之・金子皓彦1972「川崎市高津区馬絹古墳発掘調査概報」『川崎市文化財調査収録』8(複写)

馬絹古墳の史跡指定について(墳丘・石室模式図などのスケッチ図含む)

「神奈川県文化財指定申請書の進達について」(複写・昭和46年7月付)

「神奈川県文化財指定申請書」(複写・昭和46年7月付) ※周辺地図や買収予定地(公図写)含む

「馬絹古墳」概説(昭和46年7月5日のメモ書き)

「川崎市・県史跡馬絹古墳の保存活用計画について」(昭和53年1月13日のメモ書き)

「馬絹古墳保存活用計画調査に伴う指導方について」川崎市教育委員会教育長よりの依頼文

(昭和53年1月付) 馬絹古墳保存活用計画調査 一実施計画日程案一

「馬絹古墳指定理由」など

02119 メモ書き略側図

石室内各補強状況写真10葉

※写真台紙として賞状紙の裏面を使用のため、賞状の表に加飾されていた鳳凰の金粉が、重ねて保管されていたために写真に付着してしまっている。

期日等の記載がされているものは次のようなものがある。

02075には1977(昭和52)年10月刊の要覧と、1978(昭和53)年2月の文書、同年3月の調査報告書が入っている。02077には1982(昭和57)年2月とメモ書きされた写真がある。02088には1971年7月付の申請書・進達文があり、1972(昭和47)年4月21日刊の神奈川新聞記事、同年刊行の川崎市文化財調査収録8が複写されている。1978年1月13日とメモ書きされた保存活用計画にかかる書類、同年1月付の依頼文がある。02119が入れられていた封筒には、1978年1月28日川崎との消印がある。

馬絹古墳に関係する発掘調査及び整備に関係するものには次のようなものがある。

1971年に宅地造成工事に先行して樋口清之・金子皓彦両氏の指導のもとで発掘調査が実施される。川崎市教育委員会ではこれを現状保存するため、神奈川県からの補助金を得て古墳部分を公有地化、史跡公園として整備を実施。石室内部は亀裂が生じていた為、H鋼等で補強している。また、神奈川県教育委員会は「南武蔵

における終末期古墳として、その教育的・学術的な価値が高い」とし県指定史跡に指定している。

1977年に川崎市教育委員会は、「考古学・構造力学・保存科学の3分野からなる保存活用計画調査」を実施。あわせてH鋼等で石室内部の補強も実施。

1990(平成2)年からは、1977年の調査結果を受け、再度5カ年計画で、考古学・構造力学・保存科学・物理探査・公園景観等の分野からなる保存整備活用事業が実施された。その一環で1990年には、竹石健二氏の指導で、墳丘部分を含む発掘調査が実施された。

このうち、それぞれの上記日付を考慮すると、1977年の川崎市教育委員会による保存活用計画調査に深く関わっていたことが伺え、その際に撮影・収集・使用された資料とみられる。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

馬絹古墳は、矢上川流域の沖積地を望む台地の南縁辺に立地する。矢上川と平瀬川に挟まれた多摩丘陵の東端部、樹枝状に開析された台地の南東斜面を志向した縁辺に築造されており。いわゆる山寄せ式の古墳とも呼べる。周囲2km程度には安定した群を形成する古墳はみられず、馬絹古墳は単独で存在しているようであるが、多摩川の段丘上には新作古墳群や梶ヶ谷古墳群などが所在する他、多くの横穴墓群が存在する。古墳が立地する付近の標高は43m前後を測り、田園都市線梶ヶ谷駅の南方1.2kmに位置する。

墳形は円墳で径は33mを測り、周溝は幅3.5m前後、深さ1.5m前後で南東側の台地斜面部で途切れる。周溝の墳丘側には一段のテラスがあり、幅・深さ共に10cmを測る小溝状を呈す。墳丘は北西側で1段、北東・南西側では2段、南東側では3段築成であると推測されている。高さは北側で約3m、南側で4.5mを測る。墳丘はローム土と黒色土の互層にて築造され、裾部から中央部に向けて比較的厚めに積み上げ、これと並行的に石室が据えられる。また、石室側に向かつては版築層の斜面を斜めにし、極めて薄く積み上げられる。この土壌の中には石室の用材として使用した泥岩の残滓が混入する。1987(昭和62)年の金子皓彦氏の南側隣接地の調査では、石室前面にあたる斜面にも墳丘と同様の版築層が広範囲に認められたとされている。

石室は3室の複室構造(奥室・中室・前室)をなし、全長は9.3mを測る。奥壁は高さ2.2mの釣鐘形をした石が据えられ、それを中心として切石が周りに積み上げられる。泥岩切石による切組積で、天井部に向け持ち送りによる構築がされ、目地には白色粘土が塗られていた。奥室はほぼ3×3×3mの正方形ながら、中室と前室は胴張状をなす。床には全面に拳大の礫が敷き詰められ、閉塞には切石が用いられる。石室の掘り方は地表面を1mほど掘り下げ、地山のローム土を半地下式に掘り込んだものとされる。石室の石材裏側には裏込め等の石を入れず、直接土を積み上げている。

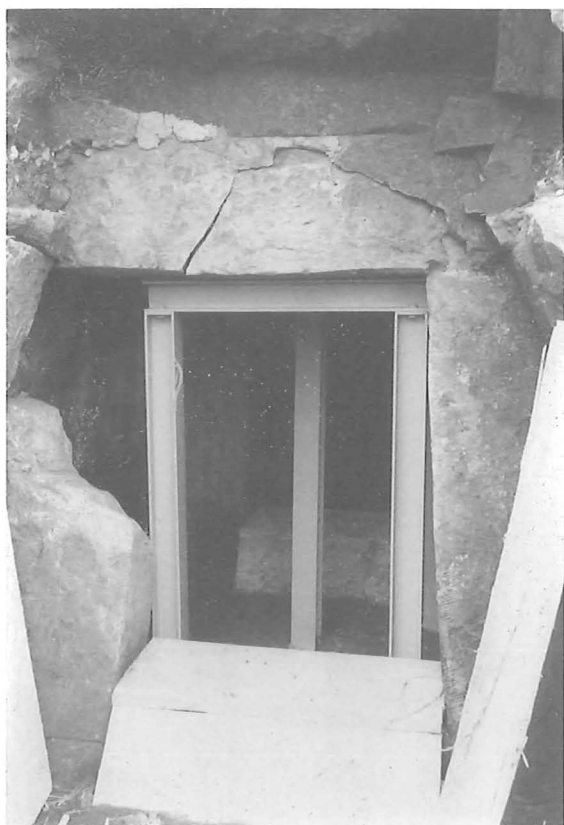
奥室部を中心に鉄釘が79点発見されている。石室内から出土した鉄釘は数量が多いことから、棺に使用されていたことと共に、棺は複数が存在したことも考えられる。02088の赤星氏によるメモ書きには玄室(奥室)45点・第二室(中室)29点〔第一室(前室)からも5点出土〕とのメモもある。古墳は史跡公園として整備され、現地には解説パネルなども配される。石室入り口は土壌・発泡スチロール・麻土嚢などで埋め戻され、石室内部の人的観察は、定期では10～20年のインターバルとされている。(柏木)

参考文献

樋口清之・金子皓彦1973「川崎市高津区馬絹古墳発掘調査概報」『川崎市文化財調査収録』8

東急建設株式会社技術研究所1978『馬絹古墳保存活用計画調査報告書』

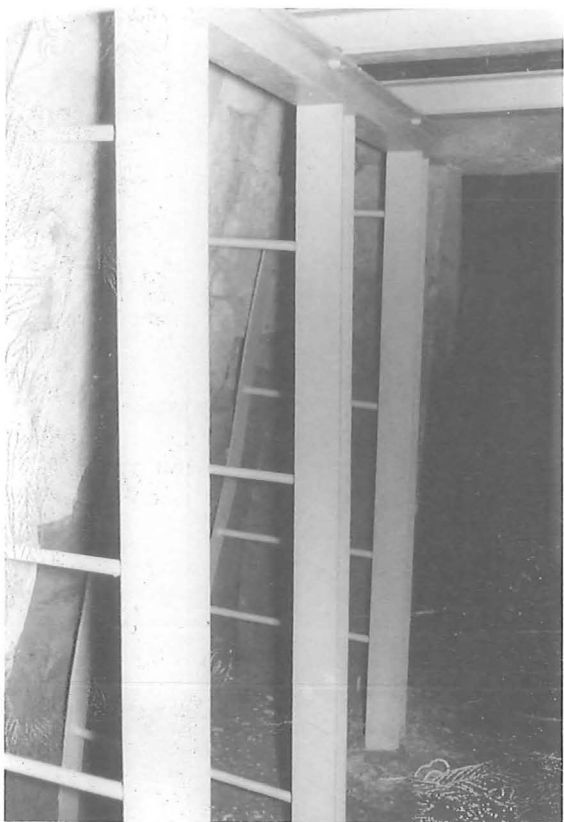
川崎市教育委員会1994『神奈川県指定史跡 馬絹古墳 保存整備・活用事業報告書』



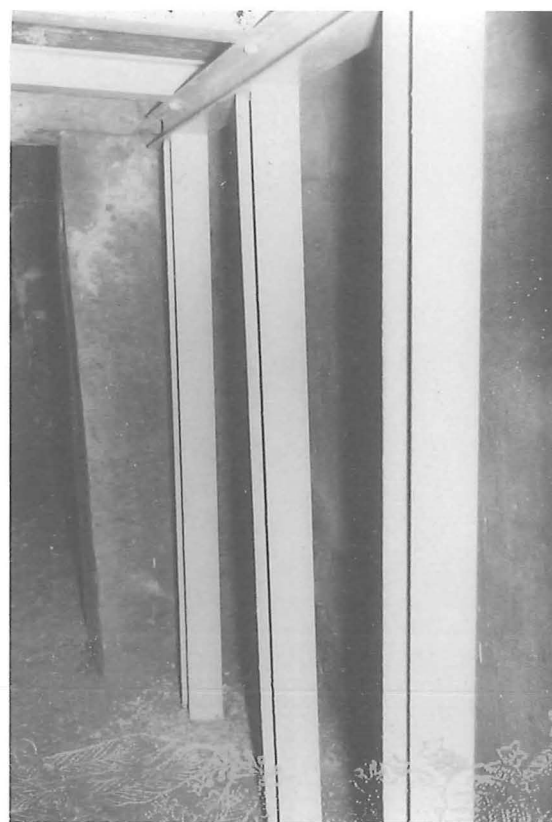
入口からみた玄門



奥室側からみた中室（東側壁）と玄門



前室側からみた中室（西側壁）

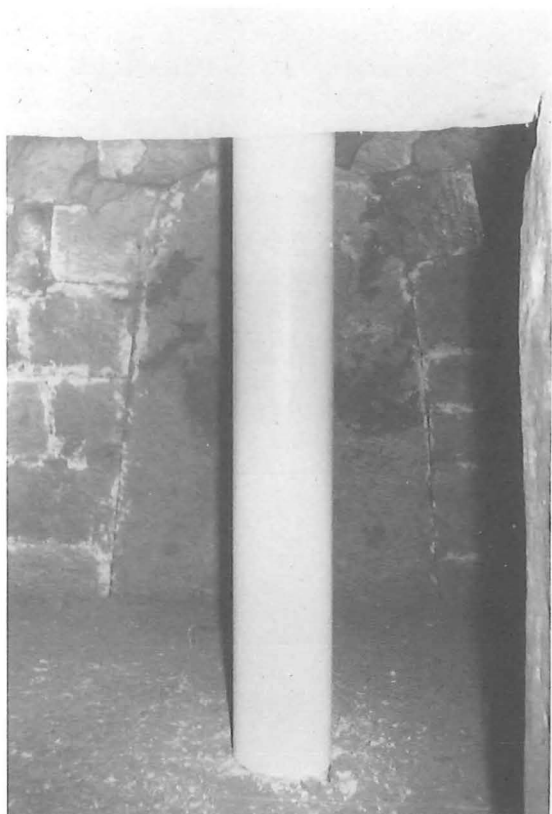


前室側からみた中室（東側壁）

写真3 最終設備以前の横穴式石室内補強状況その1〔1977(昭和52)年〕



奥室西側壁（円文）



中室側からみた奥室



前室天井部



奥室天井部

写真4 最終設備以前の横穴式石室内補強状況その2 [1977(昭和52)年]

年報番号02076 川崎市津田山久地横穴 川崎市高津区久地505

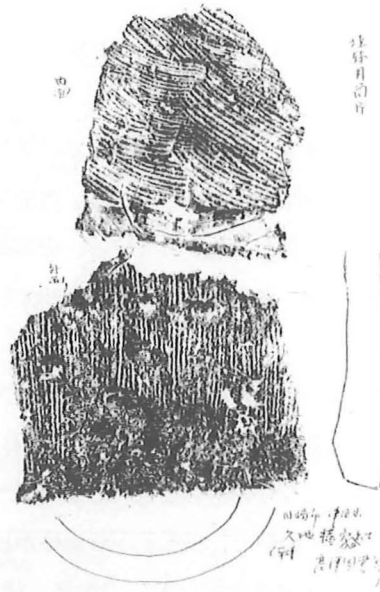
1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所]

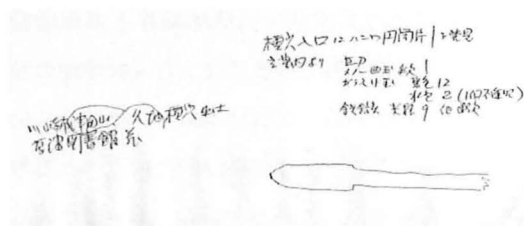
川崎考古研究所

[記載内容概略]

スケッチの入っていた封筒は、出版社もので神奈川県立博物館の封筒で、平本様と記されている。料金別納郵便のため年月日等の情報は無い。封筒裏面に「川崎市久地津田山横穴」とメモ書きされている。資料は2種類あり、資料Aには埴輪の断面図と拓本（第4図）、資料Bには鉄族の略図と出土品について記されている。資料Aには、（第5図）「埴輪円筒片 川崎市津田山久地横穴入口出土 高津図書館蔵」と記載されている。拓本は内外面、実測は断面と底部の図面が取られている。資料Bには、「川崎市津田山久地横穴出土高津図書館蔵」と、「横穴入口にハニワ円筒片1を発見 玄室内より 直刀 メノ一 曲玉 半欠1 ガラス小玉 碧色12 水色2（1個不透明）鉄 鍔 尖根9他断欠」と記載されている。



第4図 円筒埴輪（凡そ1/4）



第5図 鉄鍔円筒埴輪（凡そ1/4）

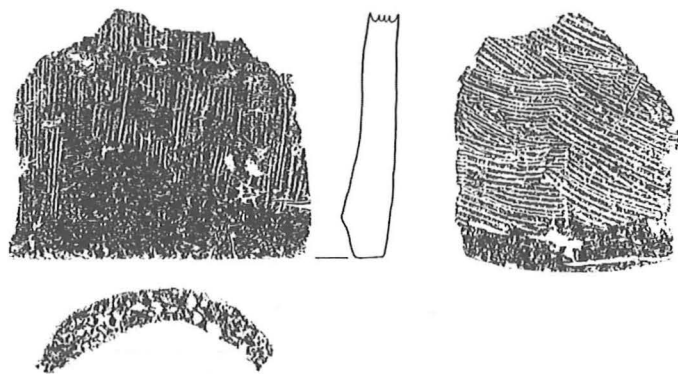
2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

津田山久地横穴群は津田山の北側に位置し、多摩川沖積地から入り込む小さな開析谷の西側奥に展開する。この開析谷近辺には、浄元寺裏横穴群や久地西前田横穴墓群など、多くの横穴群が展開している。津田山久地横穴群は、山麓に4基、やや上部斜面に2基、総数6基から構成されている。いずれも既開口である。1957（昭和32）年1月26日から28日の3日間、高津図書館友の会郷土史研究部により、4・5号横穴墓の2基の調査が行われた（新井1959）。

4号横穴墓の形状はドーム形天井で、

玄室平面プランはほぼ円形を呈している。4号横穴墓からは、直刀片などの鉄製品が出土している。5号横穴墓の形状は、4号横穴墓と同じくドーム形天井であるが、玄室平面プランは前壁をもつ隅丸長方形を呈し



第6図 円筒埴輪片（凡そ1/4）（浜田1991から引用）

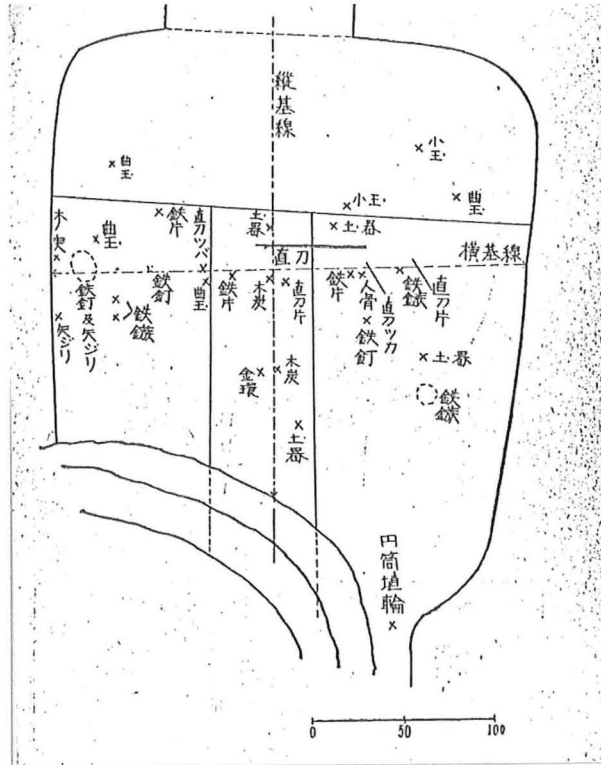
ている。床面中央部には、幅約60cm、深さ15cmの不整形の溝があり、排水溝と見られる。床面はこの溝を中心として左右で高さを異にする。玄室奥壁寄りに棺座が作られている。5号横穴墓からは、棺座上より勾玉と小玉が各2点、棺座前面の右側部分より勾玉2個・鉄鏃・直刀・鉄釘など、左側部分からは人骨・直刀・鉄鏃・鉄釘、中央排溝からは耳環・直刀などが発見されている。玄門の壁寄りからは円筒埴輪の底部片が1点出土している。

この円筒埴輪片の外面は、丁寧にタテハケ調整を施し、底部調整が認められる。内面はヨコ及びナメハケ調整が施されている。底部調整から川西編年Ⅴ期、6世紀末から7世紀初頭に位置付けられる。

津田山久地横穴群の所在する川崎市内では、埴輪が出土したことが確実なものは12例、出土したという記述だけのものを含めると15例が確認されている。その中で、横穴墓から埴輪が出土した事例には、「金堀2号横穴墓」「日向5号横穴墓」「津田山久地5号横穴墓」の3例が挙げられる。金堀2号横穴墓では玄室部で円筒埴輪片と形象埴輪片、日向5号横穴墓では前庭部から人物埴輪の頭部が見つかった。埴輪は本来、古墳墳丘に樹立されるものなので、埋葬施設内に樹立される事例は認められない。このことから、本来は横穴墓の上ないしは周辺に構築された古墳から流入したものと見られる。

最後に本横穴墓の時期について考えてみたい。津田山久地5号横穴墓からは、多くの副葬品が出土しているが、年代が特定できる土器などは出土していない。また、副葬品の出土状況から3回以上の追葬が行われていたことが推定できるので、副葬品から時期を決定するのが難しい。横穴墓の形状から見ると、天井がドーム形を呈している点、平面プランが長方形を呈している点などから、6世紀末から7世紀初頭に位置付けられる。

(新山)



第7図 津田山久地5号穴横 平面図 (高津図書館1957)

引用文献

- 高津図書館友の会郷土史研究部1957「津田山久地横穴古墳群清掃調査」『たちばな』18号 高津図書館友の会
 新井 清1959「津田山久地横穴群」『考古たちばな』5・6合併号 高津図書館友の会郷土史研究部
 新井 清1988「津田山久地横穴墓群」『川崎市史』資料編1 川崎市
 伊藤秀吉1967・68「川崎市の古墳(1)・(2)」『川崎市文化財調査集録』3・4 川崎市教育委員会
 川西宏幸1988「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 日本考古学会
 佐藤善一・伊藤秀吉1989「川崎市内の高塚古墳について」『川崎市文化財調査集録』24 川崎市教育委員会
 浜田晋介1991「川崎の埴輪Ⅰ」『川崎市市民ミュージアム紀要』第4集 川崎市市民ミュージアム
 浜田晋介1996「川崎の埴輪Ⅱ」『川崎市市民ミュージアム紀要』第9集 川崎市市民ミュージアム

等から推察すると赤星氏記載の「久地浄元寺横穴墓」ではなく「浄元寺裏横穴墓」と考えるのが妥当であろう。本遺跡は宅地造成工事により1962(昭和37)年に開口したが、すでに3基は消滅し5基のみが遺存していた。このうちの1号墓は、奥壁寄りに棺座を持ち、組み合せ式石棺1基が設置されている。出土品は石棺内に人骨、耳環1、石棺外からは銅鏡1、直刀1が出土している。銅鏡は赤星氏が挙げた遺跡以外にも出土が確認されている。本遺跡に近いところでは川崎市日向横穴墓で1点、さらに伊勢原市三ノ宮登尾山古墳で1点を確認されている。資料②の須恵器脚付長頸壺は7号墓出土遺物と考えられ、他に土師器杯1、直刀1、鉄鏃数点が出土している。ところが、資料①の提瓶は出土地点に関する資料が見当たらず、浄元寺周辺の横穴墓群の出土ではない可能性もある。脚付長頸壺の年代は7C前半頃、提瓶もほぼ同時期のものと考えられる。(林)

[掲載図書]

川崎市市民ミュージアム1988『川崎の考古－市民ミュージアム考古展示図録－』

[掲載図書概略]

銅鏡および小刀の写真が77頁に掲載される。

引用・参考文献

神奈川県県民部県史編纂室1979『神奈川県史』資料編20考古資料

小出義治1974「岩井戸横穴群出土の遺物」『秦野下大槻』 秦野市教育委員会

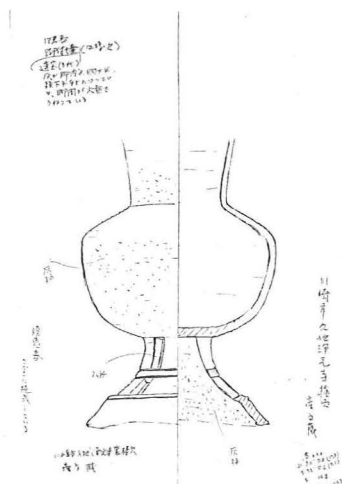
杉山博久1980「秦野市内の横穴墓群」『秦野の文化財』第16集 秦野市教育委員会

川崎市1988『川崎市史』資料編1 考古・文献・美術工芸

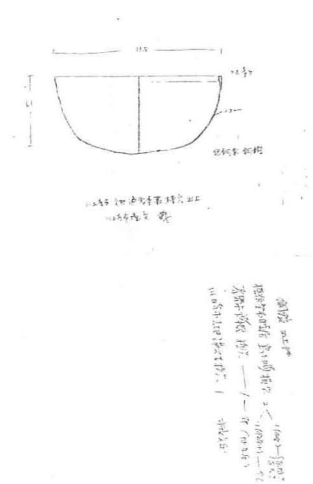
横須賀市1988『横須賀市史』市制施行八〇周年記念<上巻>



第8図 資料①須恵器・提瓶のスケッチ (原図の約1/5)



第9図 資料②須恵器・脚付長頸壺のスケッチ (原図の約1/5)



第10図 資料③銅鏡スケッチ (原図の約1/5)

年報番号02112 川崎市 川崎市平瀬川トンネル際横穴 川崎市高津区津田山

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所]

高津図書館蔵と記載される。※現在高津図書館には所蔵されておらず、所在は不明である。

[記載内容概略]

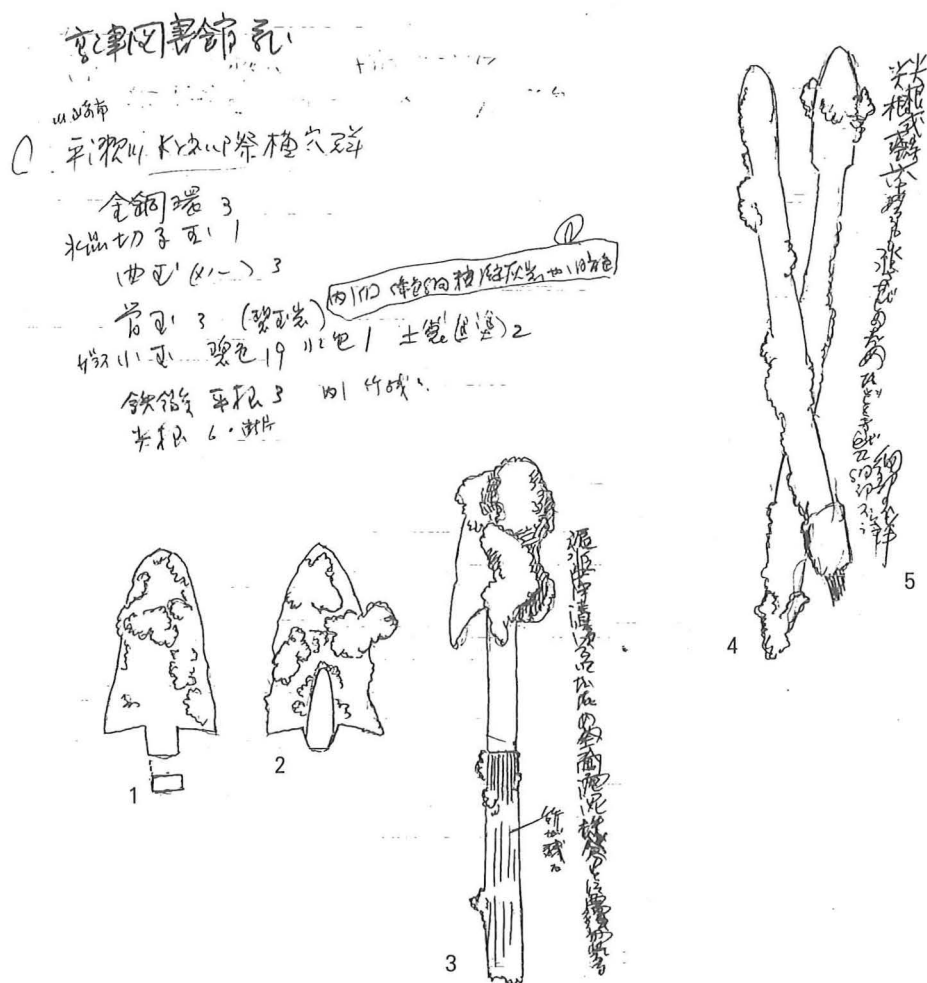
図が入っていた封筒は「明治村通信」と印刷のある(財)博物館明治村東京事務所のもので、神奈川県立博物館宛となっている。料金別納郵便のため年月等は不明である。封筒裏面には「川崎市平瀬川トンネル際横穴 出土品のみの有」とメモ書きされる。図は無地B4大用紙1枚で、鉄鏃5点のスケッチがされており、「高津図書館蔵」「川崎市 平瀬川トンネル際横穴群」「金銅環3」「水晶切子玉1」「曲玉(メノー)3」「管玉3(碧玉岩)」「内1個緑色細粒凝灰岩やや暗色」「ガラス小玉 碧色19 水色1」「土製(?)塗2」「鉄鏃 平根3 内1竹残る」「尖根6・断片」との説明がある。短頸柳葉鉄鏃(第11図3)の右脇には「泥水中に漬っていたため全面泥と鉄分とに覆われる」「竹が残る」とあり、長頸鏃2本(第11図4・5)の右脇には「尖根式鏃 六あるも水さびのためひどくさびて細部不詳」と記されているが、鉛筆の上にペンで上書きされているため判読しづらい。スケッチ図は鉄鏃5本についてのみで環や玉類の図はなく、法量の情報もない。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

平瀬川トンネル際横穴墓群はJR南武線津田山駅の北東約250mの津田山丘陵南麓に位置する。この丘陵が広がる多摩川下流域一帯は古くから多くの横穴墓の存在が知られる地域で、報告数からも右岸地域の中でも最も密集する地域といえる(田村1988)。平瀬川トンネルは、平瀬川から多摩川へ放水するために昭和15～20年にかけて建造されたもので、横穴墓群はそのトンネル入口上方の南斜面に、ほぼ東西一列に7基構築されている。1962(昭和37)年9月に周辺の宅地造成工事中に横穴墓が開口したことにより、市教育委員会古江亮仁氏指導のもと高津図書館友の会のメンバーによる緊急調査がおこなわれた。すでに羨道・前庭部分は工事により削失され、遺物についても持ち出されたものが多い。同年12月には最西部に位置する1号墓のさらに南西で1基調査され、平瀬川トンネル際西横穴墓と呼ばれる。これらのうち4号墓と西横穴墓には石棺の設置が見られるなど、多摩川下流域の横穴墓の特徴が見受けられる。2つの石棺とその内外に8体分の人骨が出土し、追葬が認められる他、多数遺物が出土した。

以下、本資料の鉄鏃5点を「長頸鏃出現以降の県内古墳出土鉄鏃分類試案」(古墳時代プロジェクトチーム1994)によって分類を試みる。第13図1・2は無頸で、形状・大きさから「無頸b型」と推察される。全長はともに5.3cmほどで、腸袂部の幅は1が2.9cm、2が3.1cmほどである。鏃の付着が激しいが、1と2では鏃身先端部や茎部、腸袂部の平面形が若干違うようである。3は柳葉型で逆刺の大きい「短頸腸袂柳葉a型」と推察される。鏃身部は鏃による膨張と右腸袂部分に欠損が見られる。頸部長は3.6cmほどで、「竹が残る」のコメントとともに6cmほどの竹の柄が描かれている。4と5は長頸で、2つは鏃着しているような描写である。4は残存全長およそ15.7cm、そのうち鏃身部は3.2cm、長頸部は12cmほどで、腸袂が無い「長頸柳葉型」と推察される。5は全長およそ13.8cmで、鏃身先端部が尖る形状から「長頸鏃箭a型」であろうか。篋被部分には若干の段がついているようにも見受けられる。また、微少だが木質柄部の残存が見られる。以上の計測値はすべて図上でのもので、スケッチ図はほぼ実寸に近いと想定される。



第11図 赤星ノート02112 (原図の約1/2) ※遺物番号加筆

津田山丘陵には幾多の横穴墓の群集があるが、それらは昭和30年代以降の開発時に調査・報告されぬまま消失したものも多い。当横穴墓群の発掘調査については高津図書館友の会による報告がされている(新井・持田 1966)が、一部を調査以前に消失しているなどその類にもれない。当調査でも遺物が確認・報告されているのは2・4・7号墓のみであるが、実測図の掲載はない上に、遺物種別・点数構成は今回紹介したものとは全く合わない。半面、遺存状態の非常に良好とされるトンネル際西横穴とは遺物種別・点数構成は非常に似通っている。アーチを持つ新しい形式の1・5・6号墓を除き、形式的に西横穴と同じ7号墓か、遺物なしと報告されている3号墓あたりから、調査以前のどこかの段階でこれらの遺物が採取・スケッチ・保管されたものの可能性もあるだろうか。本赤星ノートに年月の情報が残されていないのが悔やまれる。(吉田)

[掲載図書]

新井 清・持田春吉1966「川崎市津田山横穴群概要」『考古たちばな』第5・6合併号

川崎市1988『川崎市史』資料編1 考古 文献 美術工芸

参考文献

古墳時代研究プロジェクトチーム1994「神奈川における墳墓出土の鉄鏃について」『神奈川の考古学の諸問題』神奈川

県立埋蔵文化財センター

田村良照1986「鶴見川及び多摩川下流域における横穴墓の様相」『川崎市内における横穴墓群の調査』